

自發活動と目的活動 (三)

——保育原理の問題——

倉 橋 惣 三

今まで述べて来たところを、念の爲にもう一度繰返して云ひますと、自發活動と云ふ問題は生活の形式としての言葉としては生活の出發點に關する問題である。生活の出發點と云ふことをよく見ると云ふことは、そこから自然の大きな法則に従つて教育をして行かうと云ふ大きな教育心の湧いて來る一つの力でありまして、其意味に於ては、自然の大きな力と云ふやうなことを少しも認めて居なかつた古い教育の考に對して非常に新しい刺激を與へるものです。又我々として其自發的活動を認めて、それをどう生かして行かうかと云ふ所に非常な努力が要る譯でありませう。しかも、それは生活の出發點に關する問題であつて、生活と云ふものは出發點と到着點と、此間の過程と此三つから成立つて居るのでありますから、到達及び過程、此問題も是非考へなくてはならぬ。ところで、自發活動と云ふものは出發點の問題であると云ひますが、併し人間の生活に於ける出發點と云ふものは、只機械的に色々のものが、ほつ／＼と湧いて來ると云ふやうなものとは少し違ひまして、或る意味に於ては結果と云ふものを抱含したるものであると見なければなりません。例へばここに蝶々が居りまして、其蝶から蝶々を追駈けて行くと云ふ一つの自發活動が引出される。其自發と云ふことは生活活動の出發點に關するものではありませんが、其子供としては只蝶々を追駈けるのが、生活ではなくして、それを取ると云ふことが、其場合に子供に於て考へられて居ることでありませう。或は考へると云ふ言葉が悪ければ、自ら其自發活動の中に

含まれて居るものであります。餘程特別な發作的な子供でありましたならば、只自然界に向つて機械的に出發するだけで終る場合もあるかも知れませぬが、併し普通の子供でありましたならば、其活動が齎す所の或る到達點、即ち結果と云ふものは含まれて居るのである。寧ろ其結果を十分認めて其結果を自發的に捉へやうとして居るのであります。つまり、出發點及び到達點と云ふことは抽象的に精神活動を分解した二つの點でありますけれども出發點と云ふことは、到達點と云ふものがあることに依つてのみ考へられるものだとも云へるのであります。總ての自發活動が發作でありましたならば、其子供が何等の到達の結果を其心の中に含まない處の純發作であつたならば、それだけでは一つの精神活動の出發點と云ふことも出来ない。單純な機械に過ぎないのであります。併し苟くも多少の精神生活の體を具へて居る程の年齢の子供でありましたならば、其蝶々を捉へると云ふこと、そのことを心で自發して仕舞つて居る、さうまあ見て宜からうと思ふのであります。

然らば目的活動と云ふ言葉と自發活動と區別して云つて居るが、何處を本當に區別して居るのであるかと云ふに、若し自發活動と云ふものが出發點であつて、結果目的と云ふものは到達點であると云ふ此分け方からだけ見れば、只今説明した所に依つて、其自發活動内に目的と云ふものが含まれて居る。既に其自發活動に目的が含まれて居るのであつたならば、所謂活動と云ふものと其目的を含んで居る所の自發活動は何處が違ふか斯う云ふ問題が起つて來ると思ひます。之に付てデウエーの申して居ります言葉の中に之を説明するに都合の宜い言葉があると思ひますが、デウエーは思考の心理を考へて、思考と云ふことは抑止されたる結論であると云つて居る。此意味は、人間の殊に子供などの生活に於ては、總て結果、言換へれば一種のコンクリーションと云ふものに直ぐ飛んで行く、蝶々が居ります取りたいと思ふと直ぐ取れると思ふ。取りたいと云ふこと、取れると云ふことを直に食付けて仕舞ふ。抑止せられざる結論を子供の心の中に畫いて居る。またあの樂天的の人々は——思ふこと盡くなると思つて、さうして計畫ばかりして、色々のことを考へては思付いては止

めて居る人々は、君のやうにさう考へた所で、一々なるものぢやないと云つて笑はれますが、其人はどこが笑はれるに値するかと云へば思付くと云ふことゝ行かれたると云ふことゝ、出發することゝ到着することゝの間に何らの距離を置かないところが笑はれるのです。出發する、即ち到達するといふ風に、一切抑止の條件を入れて居ない人が思慮の淺い人であると云はれて居りますが、實は思慮の短い人といふていいのでせう。

考へると云ふことゝ、或る目的を解かうと思ふことゝは同じ様な手つゞきです。目的は到達點は向ふにあり、それを解かうとする心の出發點は此方にありますが、思考の生活に於てはどうであるか、可なり距離のあるものであると云ふことは慎重に知つて居る。斯うだから斯うだと一人定めしないで、早定めしないで、此間に此處から此處に行く間にさう一と飛びには行けないと云ふ抑止活動が此處に行はれるのであります。是は思考と云ふことを抽象的に考へた場合でありますが、具體的に或る目的に到達すると云ふ其生活に於きましても同様である。自發活動と云ふものは目的のない生活ではないのでありますけれども、目的と自分の自發との間の道程と云ふものに付て、何らの注意を拂つて居ない生活であると云ふことが出来ると思ふ。お月様を取つて呉れろと云ふ子供は、我々が普通解釋する所に依りますれば月に到達する距離が遠いからと云ふ實際上の距離と云ふ話にして解しますが、其子供に於ては月を取らうと思へば其月は直ぐに自分の手に来るものだ、到達するものだ、思へば向ふから飛んで来る位に思ふ。斯う云ふ風な心の状態に居るのです。我々でありますと云ふと、此問題を解きたい、彼處に行きたいと思ひましても、それには道があつて、其道は出鱈目に飛んで行つては他の方に行つて仕舞ふと云ふ考慮もある、其考慮が我々の活動を抑止する。其抑止得ただけでありましたならば、應じて驚かず臨んで動かさず、只静止状態に居るのでありませうが、眞實な自己活動と云ふものは此抑止得たる結論で、即ち出發點と到達點との間へ適切なる道程を入れて来る、適切なる過程を入れて来る、心理的には記憶を持出すこともありませう、經驗からあるものを得て來ることもありませう、兎に角色々の道を行つて、此道を蹈んで行くと云ふことをして、此方か

らも行かないで此方からも行かないで、此處に到達する、斯う云ふ順序を辿つて行くのが、即ち思考であります。

此デューエーの云つて居る目的活動と云ふものは、詰り目的を持つて居る活動と云ふ言葉でありますけれども、自發活動と雖も實は目的に向つての自發活動であるのだとすれば、普通云ふ所の目的活動は寧ろ過程を考慮したる活動である、斯う云つた方が適切であります。我々お互に、ものごと直ちに成るものがないと云ふことは知つて居る。人間でありまして、何か非常に希ふ所の目的を非常に強く持ちますと云ふと、心が惑つて仕舞つて、熱心なるが故に其手續を誤り、抑止しないと云ふやうなことがあるのであります。其道をちやんと辿つて行く時に所謂目的活動と云ふ言葉が現はす所が現れて来る。そんならば何故道程或は過程活動と云はずして目的活動と云ふかと云ふことが言葉使ひの問題ではありますが其處に起る、此自發活動であつても目的と云ふものが含まれて居るのだと云ふことを今申しましたが、併し更に進んで考へれば、此抑止せられたる或る距離或は間隔、實際上の場合としては、或る種の困難、實現の困難、斯くの如きものを此處に挟まない目的と云ふものは本當の出發點から差別せられたる目的と云ふものゝ性質を帯びないことになるのであります。言換れば其過程を考へた時だけ目的と云ふものが心理的に判然したのものになつて来る事實はありますのであります。

或る人又考へて云ひますのに、我々が目的を意識する心理状態は其目的の大切さを知ればそれで宜いのである、大切なことを知れば宜いのである。詰らない目的は意識しやしないが、大きな目的は意識するものだと言ひます。併し、其大切と云ふことは其中になかく容易に實現出来ないと言ふ困難性を含めて居る場合の方が多いのであります。我々が一步踏んで行ける所は何も此處を目的だと思ひませぬ、私が歩いて居る時に私の右の足が到達する其三尺の先きを目的として歩いて居るかと言へばさうてはない。是は樂々行けるからそんなに目的だと言ひませぬけれども、山を越えて、坂を越えて、障害を越えて辛うじて到達出來べきものは、私にとつて目的としての意識が判然して来る。詰り目的と云ふこと

は此中に含まれる時に簡單なことでありますけれども、意識の上に判然して来る爲には過程を含んで居る。逆に云へば過程を特に考へた時に目的が判然して来ると云ふことは、目的が判然して居る時だけ我々は過程を尊重した生活をして居ると云ふことになりませう。出發點だけがあつて、何處へ行つても宜いやうな、飛んでつても宜いやうな、詰りどうなつても宜いやうな生活であつたならば、過程も考へて居ないが、それだけ目的も判然して居ない、此道を斯うく、斯うく、辿つて行かなくちやならぬと考へて居る時だけ我々は其目的と云ふものが、他のAでもなく、Bでもなく、Cであると云ふことがそこに判然意識されて来る、斯う云ふことが出来ると思ひます。

此意味に於て目的活動と云ふものは自發活動と別なものでなくして、自發活動と云ふものが、意識上に判然して、自發活動の中に含んで居つた目的と云ふものが分解されて判然した獨立の意識に上つて来る。さう云ふ風に云へると思ふのであります。之を縮めて申しますならば、目的活動の一番狙つて居る所は、其活動に目的があるかないかの問題ではなく、過程をしつかり考へて居るかどうか、早呑込しないで、うかくして居ても出来ると思はないで、出鱈目でも到達すると思はないで、過程に向つて慎重に考慮を拂つて居る生活と云ふことになりませう。近來の目的活動と云ふことを主にして色々行はれて居ります教育學說教育方法は盡く生活過程の訓練を主にして居る。抑止せられたる生活過程に向つて適切な材料と適切な順序を持つて来ると云ふことは即ち生活の組織立つと云ふことであります。自發活動を主としたる生活は自發活動と云ふ所に値打を置いて云ふならば、其生活が組織立つて居るや否やと云ふ問題は這入つて来ないのであります。どれだけ生活動力を居るかと云ふ問題が主になつて来る。過程を入れて来た時に其生活がどれだけ動力を持つて居るかと云ふ問題を離れて組織立つて居ると云ふことの方の問題になつて来るのであります。昔の只子供を外から導外く、から引立て、教育すると云ふことをして居りました時代に、第一に氣が付いたものは皆子供は自分で生活を出發するものであると云ふ問題で、それが大いに教育上に貢獻しました。其問題が更に進歩いたしますと云ふと、其出發動力と云ふも

のを勿論尊重しながら、而も生活の組織立つと云ふことを主にして来る。組織立つと云ふことが主ならば、外から子供に組織立つた生活を與へて宜いのであります。組織立つと云ふことだけが、必要な條件ならば、手を引張つて行つても生活が出来るのでありますが、既に自發と云ふ問題が此處にある以上は、動力がある組織立つた生活と云ふ問題を考へなくちやならぬ、動力のある組織だつた生活と云ふものが是が詰り兒童に對する動機と云ふことの由つて區別される所以であります。

尙ほ、教育の實際と云ふ立場から考へて見ますと云ふと、我が國では、未だ本當に此生活の出發としての生活動力、即ち自發活動を存分に發揮させてやると云ふことに就いて決して十分のことが我々出來て居るとは云へないと思ふ。此點に未だ無限の問題が残されて居ると思ひます。併しながらもう一つの問題は、假に其自發動力が發揮せしめ得たものとして、一方の組織の方をどうしてやらうかと云ふ問題に於て、益々之が我々に於て十分に行つて居ない。所で、理論上は今述べた通り二つが一緒になりますが、實際上は動力の方を主にして説いて行きますと云ふと、組織などを構はず、言換れば過程などを構はず、直ぐに此處に飛んで行きたいと思ふ、飛んで行けると云ふことばかりになりまして、自ら此方に逼し易い。組織立つと云ふ過程に對する考慮の方を餘り主にいたしますと、抑止作用が働過ぎまして、生活の自發動力と云ふものが減ずる。今日我々の惱んで居る問題は自發活動を尊重しようかと云ふ問題でもなく、有目的活動を尊重しやうかと云ふ問題でもなく、下手をするとプラス、マイナスの關係の性質を持つて居る此二つをどう實際調和して行かうかと云ふ問題が今の問題だと思ひます。

幼稚園に於きましても、小學校に於きましても、若し自發活動と云ふ原理だけに依つて自分の教育を導いて行かうと云ふ人は、所謂新らしい自由主義などいふ中にある。同時に又目的活動と云ふ言葉に促されまして、生活過程の組織立つと云ふことだけに注意を拂つて、生活動力を少しも考慮しないで、只組織だつたと云ふ生活だけに歸へる人があつたならば

是は古い頑固主義の中にある。しかも、此二つをどう調和して行かうかと云ふことの問題が、ほんとうに今日の問題なのです。殊に今日の新しい傾向は、どちらかと云へば目的活動を主にして居ります、自發活動を忘れて居るのぢやないのであります。目的活動の方を主にして考へる必要がある。是には原因がありませう。自發活動と云ふものが出發點だけ考へて、稍々發作性を持つやうな趣があつたのに鑑みて目的活動の方に非常に向つて居るのもありませう。言換れば其自發活動の詩的な所に慊らなくて、現實生活の組織と云ふことに重きを置いて、其方に大いに注意を拂つて乗出したのでありませう。亞米利加に於て幼稚園小學校の教育にプロジェクトメツツドが頻りに用ひられて居る、其實際は詰り此方の非常に考慮を拂つて居るのであります。自動といふ概念ばかり主にしてないで、動機と云ふ方に段々道入つて居るのだと云ふのであります。しかしまた實際の教育に於ては、自ら一方に偏するが爲に生活を組織立てやうとすると組織立つ方ばかり偏しても來る。子供に繪を畫かす。繪が畫きたくなつたから繪を畫くと云ふ其自發活動を主にして居つたのでは、今日足りなくなつて來まして、何の爲に繪を畫く、畫んとするの意思を子供の心の中に起さしめようとする。即ち動機を起さしめようとする。そこで繪を畫いてクリスマス額を作る。其額を作ると云ふことはクリスマスと云ふ大プロジェクトの中の小プロジェクトになりまして、其クリスマスの額を作る爲に繪を畫くといふことにするのです。即ち其時に繪を畫くのは畫きたいからどんな繪でも畫くと云ふのぢやなくて、クリスマスの裝飾の繪を畫く、其畫くと云ふことに於ては目的が判然して居るのでありますから、それに適切な繪を畫かなくちやならぬと云ふことで組織立つて來るとするのです。

所が又若し餘り其目的結果の方を主にして子供を導き過ぎますと、子供は繪を畫きながら、畫いて居る現在の生活に對しての動力が減りまして、是は何になるのだと云ふことばかりを注意するやうになる。つまり自發活動と目的活動を二つ並べて始終よく考察して行かなければならぬといふのが、今日の吾々教育者の新しい苦心なのです。(終)